

地域を愛する心が動かした

香川県
高松市

うどんから うどんへの 循環プロジェクト



「うどん大好き」

太陽や風の心地良さを感じる季節です。この豊かな自然エネルギーをもっと賢く使えないものか、日本国内でもさまざまな実践が始まっています。「うどん県」香川で、廃棄されるうどんを使って、燃料や発電など県産小麦づくりに活用する循環システムを考え、動き出した人たちがいます。



「さぬきうどんはコシがいのち」と香川さん

▼液肥で県産小麦を育てる伊藤さん(左)。「華刈りや収穫もイベントに」と久米紳介事務局長



無農薬県産小麦を育てる
「昨年は種播き後に雨が多
く収量が少なかったんです
が、今年はいいですね」
「うどんまるごと循環コン
ソーシアム」協力者の一人、
伊藤伸一さん。
「うどんまるごと循環」シ
ステムは、うどんの製造過程
で出る廃棄されたうどんか
ら、酵母の力でエタノール
（燃料）を抽出、さらにメタ
ンガスを取り出して発電や発
熱に利用し、残った液体肥料
（液肥）を使って、無農薬無
化学肥料でうどんの原料とな
る県産小麦「さぬきの夢20
09」を育てるといふもの。
まさに、「うどんからうどん」
への循環です。
「夢ですよ。輸入でいくら
安く原料が手に入っても、輸
送でのCO₂排出量を考えたら
ら地産地消がいい。気候変動
をみんなが実感しているでし
ょう。身近でできることを少
しでもしたい」
伊藤さんは、地元業者が立
ち上げた「うどん県電力」（太
陽光発電）にもかかわってい
ます。「地元の仕事もお金も
回るしくみが大事ですから」。
始まりはもっといいない



メタン発酵設備

「県も市もかわるようにな
って、学校教育に利用する
までになりました。ここまで
ひろがると思わなかった。
うどん屋さんも、プラント会
社も、市民も、みんなで考え
たらからです」と会長の角田
富雄さん。

編集部
から
6面、埼玉県平和資料館が
開館した30年を、本紙でも
「新婦人が始めたのききか
け」130以上の団体にききか
けた。この研究が完成すれば、
香川さんがいのように、集落
ごとにバイオガス発電するの
も夢じゃない。現在焼却処分
されている生ごみを活用す
ればCO₂の削減ができ、化石
燃料も使用を減らすことがで
きる。小規模にやっても採算
がとれます。これで私たちも
営業活動ができるわけですか
ら、ありがたい話です」
農産のいりごと小麦、塩田
の塩を活用して食べ続けられ
てきた香川の郷土食「うどん
への愛情が、このとりぐみ
を引っ張っています」

「みんなの力」と角田会長
「さぬきうどんはコシがい
のち。しっかり踏んだ麵生地
でつくったうどんをゆでるの
に、12〜13分かかる。お客さ
んにコシのあるゆでたてを食
べてもらいたいから、なか
には廃棄させるをえないどん
も出るんです。製麺工場出
るものと合わせてその処理に
うちで年間400万円ほどか
かりますから、それくらいの
設備投資で循環型の設備がで
きれば。店舗近くにそれを
据えて、燃料や電気もまかな
う。夢みないですけど、うど
ん県香川がエコでもがんはっ
ていることを知らせたい」
郷土の味を支えてきた小麦
生産が1980年代後半の2
年続きの大雨で激減、さぬき
うどん用に開発されたオース
トラリア産小麦に代わってか
ら50年。20年以上前から研究
してきた県産小麦「さぬきの
夢」は、コシも風味もあるも
ちもち感が人気になるほど
に。
「課題だった大量に出る液
肥をどうするか、これもま
なくめぐがたちます」と、代
表取締役の池津英二さん。食
品廃棄物からメタン発酵させ
エネルギーを引き出す研究
は、10年前から取り組んでい
ました。目下、国の補助金を
申請し、大量に出る液肥を保
存性のいい固形肥料として活
用する研究のさなかです。
「この研究が完成すれば、
香川さんがいのように、集落
ごとにバイオガス発電するの
も夢じゃない。現在焼却処分
されている生ごみを活用す
ればCO₂の削減ができ、化石
燃料も使用を減らすことがで
きる。小規模にやっても採算
がとれます。これで私たちも
営業活動ができるわけですか
ら、ありがたい話です」
農産のいりごと小麦、塩田
の塩を活用して食べ続けられ
てきた香川の郷土食「うどん
への愛情が、このとりぐみ
を引っ張っています」



この品質向上へ努力を惜し
まなかったうどん業者が、さ
らに、この液肥を使った県産
小麦の品質向上にもひと買
いいます。
地元の会社が支える
プラントの製作から実用化
までは地元の仕事機械メーカ
ー構えた製作が担当。現
在さぬき製業などの廃棄うど
んを週一回受け入れ、バイオ
ガス発電による売電収入は年
間700万円ほどになるとい
います。